

# 次の世代に伝える 「宗門問題を理解するために」

(新改革通信)

## <目次>

- 1、 仏教の歴史は僧俗差別との戦い・・・・・・・・・・ 1
- 2、 宗教改革とは宗教的依存・隷属からの自立・・・・・・・・ 3
- 3、 僧俗差別との戦いは人間の尊厳を守るもの・・・・・・・・ 5
- 4、 宗門問題により明確になった成仏の意義・・・・・・・・ 7
- 5、 宗門問題により浮かびあがった衣の権威の正体・・・・・・・・ 9
- 6、 なぜ、宗門の僧侶は信心を失ったのか？・・・・・・・・ 11

## (1) 仏教の歴史は僧俗差別との戦い

平成4年3月30日、私たちは法主・日頭の退座を求めて宗門を離脱し、「青年僧侶改革同盟」を結成しました。そして宗門改革を訴え、「改革通信」等を発信してきました。このたび、離脱30年を新たな出発として、シリーズ「宗門問題を理解するために」を作成し、宗門の問題点をさらに追及することとなりました。一体、宗門の何が間違っているのか——。仏教の歴史と大聖人の教えから、問題点を明らかにしていきます。

### 今回の論点

- 1、宗門問題は特殊なことではなく、仏教の歴史は僧俗差別との戦いでもあった
- 2、僧俗差別の思想は釈尊滅後の産物、釈尊の有名な弟子には女性も在家者もいた
- 3、釈尊の民衆救済・平等思想に立ち返えることを説いたのが法華経である
- 4、法華経と日蓮大聖人の教えに背き、宗門は僧俗差別を唱えている

### 1、宗門問題は特殊なことではなく、仏教の歴史は僧俗差別との戦いでもあった

宗門問題は単なる教団同士の争いではありません。宗門が持っている僧俗差別の体質から生じたもので、創価学会は、そのような差別思想は大聖人の教えに反していると、宗門の間違いを糾しているのです。

このような僧俗差別との戦いは釈尊滅後から起こっています。一方、大乘仏教の精髓である法華経、そして、日蓮大聖人も一切衆生の平等を説き、「法師品には若是善男子善女人乃至則如来使と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり」（権地四郎殿御書）と仰せです。

それに対して宗門は「僧俗がまったく対等の立場にあるように言うのは、信徒としての節度・礼節をわきまえず、僧俗の秩序を失うものである」（平成2年12月「お尋ね文書」）と主張しているのです。

### 2、僧俗差別の思想は釈尊滅後の産物、釈尊の有名な弟子には女性も在家者もいた

釈尊の弟子と言えば男性出家者の「十大弟子」が有名ですが、初期仏教の仏典には有名な弟子の代表として、男性出家者の他に女性出家者13名、在家男子11名、在家女性10名の名前が挙げられています。これは、釈尊の時代には在家や女性は軽視されていなかったことを表していると言えるでしょう。

出家中心主義が台頭することになったのは釈尊滅後です。「阿含経」では仏教の実践を出家道と在家道に分け、在家にとどまる限り、生死の世界から脱することができないと説かれています。このような僧俗差別の思想は、釈尊滅後に作られたものなのです。

### 3、釈尊の民衆救済・平等思想に立ち返えることを説いたのが法華経である

釈尊の滅後、仏教の教団は、やがて資本家や地主から僧院や土地などを寄付されるようになり大きく発展しました。そして、僧侶たちは生活が保証されると、世俗から離れた僧院で煩瑣な教理の研究や、自己の悟りのための修行に専念するようになったのです。そして同時に、在家や女性を軽視する差別が生まれました。

そのような利己的な僧侶たちを批判して、民衆救済のために仏法を説いた釈尊の精神に立ち返えることを目指して大乘仏教が誕生しました。大乘経典において仏教を担う者として説かれるのは「成仏（菩提）を求める人」を意味する「菩薩」です。その菩薩は出家と在家の両方を含んでおり、出家・在家に関わらず菩薩の道を歩めば、仏と同じ悟りに到達することができると思ったのです。その大乘仏教の経典の中で「諸経の王」と呼ばれているのが「法華経」であり、誰もが平等に成仏できるという思想が説かれています。

### 4、法華経と日蓮大聖人の教えに背き、宗門は僧俗差別を唱えている

日蓮大聖人は、法華経に説かれた根源の法である「南無妙法蓮華経」を唱えることにより、いかなる人も仏の境界に至ることができると説かれました。御書には「されば此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず、法華経を持たせ給う人は一切衆生のしう（主）とこそ仏は御らん候らめ。」（四条金吾殿女房御返事）と、男女・僧俗の差別なく御本尊を信じる者は一切衆生の主にあたると言われています。

ところが、宗門は“僧侶が師である”という「僧俗師弟義」なるものを主張し、「僧俗師弟義を蔑ろにすれば（中略）師敵対の大謗法罪によって、必ず地獄に墮します」（平成3年11月、創価学会解散勧告書）と述べています。宗門の機関紙では「僧俗師弟義」の依文として「法華初心成仏抄」の「よき師とは、指したる世間の失無くして、聊のへつらふことなく、少欲知足にして慈悲あらん僧の・・・」を引用していますが、そもそも「よき師」が僧俗差別を説いたり、信徒の供養で贅沢したり、“我々が師だから敬え”などと言うはずがありません。大聖人の如く慈悲ある「よき師」であれば、創価学会を守り、讃えることでしょう。

また宗門は「宗務院からの指摘」（平成3年1月）なる文書で「あくまでも『弟子』の次に『檀那』であり、『檀那弟子』と示された御書がない」と述べていますが、この理屈で言えば、大聖人が「四恩抄」に法華経法師品の「在家出家の法華経を読誦する者」との文を引かれているので、在家が上ということになります。極めて幼稚な考えです。

平成3年1月、秋谷会長（当時）が大石寺に行き、法主の日顕（当時）に対話を申し込みましたが、宗門は“法主にお目通り、叶わぬ身である”と対話を拒否しました。宗門が時代錯誤の差別意識に囚われている何よりの証左です。

## (2) 宗教改革とは、宗教的依存・隷属からの自立

宗教改革とはどういう運動でしょうか？ 有名なものは16世紀のキリスト教世界における教会体制上の革新運動です。「原始キリスト教精神に帰るルネサンス的運動」とも言われ、教会の世俗化や聖職者の墮落などへの反発がカトリック教会を分裂させ、プロテスタント教会を樹立させました。そういう意味では、前回に述べた大乘仏教の誕生も宗教改革と呼べるでしょう。今回は、宗門問題における宗教改革について考察します。

### 今回の論点

- 1、釈尊は人々の自立、差別からの解放を目指した
- 2、日蓮大聖人は唱題行による自立した信心を説いた
- 3、宗門は信徒を隷属させ、支配しようとする
- 4、人々の自立、隷属からの自由を目指すのが創価学会の宗教改革

### 1、釈尊は人々の自立、差別からの解放を目指した

仏教が誕生したインド社会は、カースト制度による厳しい差別社会でありました。釈尊は生まれによる差別を否定し、「行為によって賤しい人となり、行為によってバラモンとなる」（中村元訳『ブッダのことば』）と、差別からの解放を説いたのです。

また、釈尊は入滅に際して、弟子に次のような言葉を残しています。

「この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」（中村元訳『ブッダ最後の旅—大パリニッバーナ経』）

ここに示された「自己」とは、偏見や利己心にとらわれた「小我」ではなく、「法」と一体となった「大我」のことを指すといえます。この「大我」に立脚してこそ、自立した真の「自己」であり、その自立した「自己」によって、煩惱・エゴの生命を変革していくことが、仏法の目的なのです。

### 2、日蓮大聖人は唱題行による自立した信心を説いた

日本では奈良時代に始まった荘園制によって寺院は大荘園領主となり、比叡山などは荘園から納められる米を元手に高利の金融業を営んでいました。財力と権力を持った僧侶たちは民衆救済を忘れて、世俗的な生活をしていたのです。また、当時の仏教は寺院と僧侶が中心で、成仏は難しいものとされていました。念仏は民衆に広まりましたが、死んだ後に極楽浄土へと往生するという教えでした。

そのような時代に、日蓮大聖人が「南無妙法蓮華経」と唱えれば、誰でも自分の生命にある仏界を湧現することが可能であると説いたことは、実に革新的なことだったと言えるでしょう。なぜなら、人々は僧侶や寺院を介することなく、唱題という自立した信心の修

行で成仏することができるからです。

日蓮大聖人は晩年まで大坊（身延）を建立することはありませんでした。民衆の中で法を説いて、僧俗・男女の差別なく励まし、自立した人生を歩むことを教えてくださったのです。

### 3、宗門は信徒を隷属させ、支配しようとする

今の宗門は“信徒は寺院に参詣し、本山（大石寺）に行かなければ成仏できない”と教えています。信徒は寺院や僧侶を通さなければ、仏界につながることはできないということです。これは、かつてローマ教会が“教会と聖職者を通してのみ神を知ることができる”と説いたのと同じです。それに対して“聖書を通してのみ神を知ることができる”と異を唱えたのが、16世紀にキリスト教界に起こった宗教改革です。

また、宗門で御書の講義が出来るのは、法主と法主の名代としての僧侶だけです。信徒が講義をすることは許されていません。信徒が信心を学ぼうとすれば、寺院や僧侶を通さなければならないのです。宗門は信仰を利用して、信徒を寺院に隷属させていると言っても過言ではないでしょう。

創価学会が誕生する前の宗門では、ほとんどの信徒は勤行も折伏もしていませんでした。“法を説くのが僧侶で、信徒は供養する者”という考え方だったのです。信徒は“僧侶の生活を支える糧”と見なされているのです。

### 4、人々の自立、隷属からの自由を目指すのが創価学会の宗教改革

人々の自立を説く仏教が、僧侶によって人々を寺院に依存・隷属させるものとなってしまいました。それを改革するのが現代の宗教改革です。

創価学会は長年の間、宗門を外護してきました。戦後、5万坪であった大石寺の敷地は、創価学会の寄進により117万坪に拡がりました。また、創価学会の寄進で建てられた寺院・建物の合計は356カ所に及びます。しかし、宗門が発展するとともに、裕福になった僧侶たちは贅沢や遊興にふけるようになり、貧しかった時代を忘れた僧侶たちは、次第に学会員への感謝を忘れて衣の権威を振りかざすようになったのです。

そのような宗門に対して、創価学会は“大聖人の御精神に還るべきである”と諫言しました。宗門はそれに対して「お尋ね」なる文書を創価学会に送付してきましたが、その内容は「僧俗がまったく対等の立場にあるように言うのは、信徒としての節度・礼節をわきまえず、僧俗の秩序を失うものである」と僧俗平等を否定し、“ベートーヴェンの「第九」の「歓喜の歌」をドイツ語で歌うことは、「外道礼讃」である”という教条主義的なものでした。

宗門の改革を訴える創価学会に対し、最終的に宗門は、「破門」を通告してきましたが、創価学会は“魂の独立”と意義づけ、“衣の権威”から自立した信心を築いたので、その後、創価学会は世界192カ国・地域に発展し、世界宗教として大きく飛躍しました。

### (3) 僧俗差別との戦いは人間の尊厳を守るもの

平成6年8月、全国教師講習会で法主であった日頭は以下のように発言しています。

「ミーチャンハーチャン（筆者注：ミーハーのこと）に分かるようにペコペコよ、頭下げて説いてたらよ、本当の法なんか説けやしないんだ」「民衆、民衆って言う奴ほどバカなんだ」「民衆が一番大事なんです。何をふざけたことを言ってる」

一宗のトップが民衆を「ミーハー」と呼んで蔑んでいるのです。今回は、このような差別をなくしていくことが、人間の尊厳を守る戦いであることを論じていきます。

#### 今回の論点

- 1、今の僧俗関係は、江戸時代の「檀家制度」によって制度化したもの
- 2、僧俗差別は人間の尊厳を貶め、仏界を矮小化するもの
- 3、僧俗差別は大聖人の本懐である「人の振る舞い」に背く行為
- 4、差別を許さないという強い決意と行動が平和の基礎を築く

#### 1、今の僧俗関係は、江戸時代の「檀家制度」によって制度化したもの

今の日本の寺と檀家の関係は、江戸時代の「檀家制度」が始まりです。江戸幕府がキリスト教禁制を徹底させるため、人々に所属する宗派や寺院を決めさせ、その所属する寺院が檀家であることを証明する「寺請証明書」を発行しました。この証文がなければ、檀家は就職も旅行もできなかつたのです。檀家は出生から死亡、移転や婚姻などすべて寺に届け出なければならず、法要・墓地などはもちろんのこと、寺は檀家の生活全般にわたって管理し、僧侶と檀家の主従関係が制度化されてしまったのです。

宗門は“檀家制度以前から、僧侶を師として檀家を指導していた”と言っていますが、本山（大石寺）周辺の檀家は、勤行もできず、他宗の札や神棚などを祭っている家もあります。檀家はお盆経、法事、葬儀に僧侶を呼ぶだけで日常の活動はありません。まさしく、檀家制度の姿そのものです。

法主であった日頭は一般得度7期生との面談では“学会のお陰で本山周辺の檀家の謗法が減った”と述べていました。長年の間、信心の指導がなされていなかった証拠です。

#### 2、僧俗差別は人間の尊厳を貶め、仏界を矮小化するもの

宗門には厳然とヒエラルキーが存在しています。上から並べると、法主、法主の女房、末寺住職、住職の女房と子供、所化（住職になる前の僧侶）、そしてその下が信徒になります。末寺住職の女房をファーストレディと揶揄する所化もいました。彼らの意識の中には、明確に主従関係が存在しています。

僧俗差別の問題は、主従の関係を作って人間の尊厳を貶めるだけではなく、仏界を矮小化することです。宗門の考えでは、信徒が僧侶の上になることはなく、「信徒の仏界」は

「僧侶の仏界」より下となってしまいます。これは仏界の差別であり、仏性を矮小化するものです。

実際に私たちが本山で唱題していると先輩僧侶たちが“僧侶になったのだから、学会員みたいに唱題する必要はない”と言っていました。僧侶は唱題をしなくても、唱題をする信徒より上であるという慢心が差別を生み出しているのです。

### 3、僧俗差別は大聖人の本懐である「人の振る舞い」に背く行為

日蓮大聖人は「不軽菩薩の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」と仰せです。不軽菩薩は、人を軽んじることなく、人の仏性を尊敬して礼拝行を続けた菩薩です。

この御文に照らせば、仮に、遊興をせずに真面目な僧侶であったとしても、信徒差別で人を軽んじて敬うことができなければ、大聖人の教えに背いていることになります。

宗門問題が起こった時に、真面目に見える住職でも「信徒が僧侶に齒向かうことは間違っている」と言っていました。宗門の僧侶たちには差別意識が染みついているのです。

僧侶たちは学会員が懸命に唱題・折伏をしている姿を見ているはずですが、公平に見れば、行学に励む学会員の信心は、僧侶が頭を下げて見習うべきものです。しかし、彼らは“信徒の分際で”と信徒を貶めることで、自分たちの優越感を保っているのです。これは「人の振る舞い」として絶対に許されない行為です。

### 4、差別を許さないという強い決意と行動が平和の基礎を築く

宗門は「僧侶は、総本山において修行し、血脈付法の御法主上人より免許を蒙った法衣を着ているのでありますから、大聖人の仏法の法位において、当然信徒より上席であります」（「宗務院からの指摘」平成3年1月）と述べています。しかし、本山で“特別な修行”はありません。私たちが見てきたものは、唱題をする者を蔑む風潮、所化が御書を学ぶのは夏の講習会だけ。日常的に先輩が後輩をいじめ、時には暴力を振るう。このような実態です。

「法衣を着ているから信徒より上」という主張は釈尊の時代の“生まれによる差別”と同じ考えです。日蓮大聖人がこのような考えを認めるとは思えません。

「世界人権宣言」の「前文」は、人類社会のすべての人々の「固有の尊厳」と「平等で譲ることのできない権利」を承認することが「世界における自由、正義及び平和の基礎である」という言葉から始まります。しかし、「自由、正義、平和」は観念ではなく、行動から生まれるものです。

等しく仏界を持つ人々、無限の可能性を持つ人々を差別する。この悪弊を断ち切らなければ、人間の尊厳と平等を守ることはできません。足元にある「僧俗差別」と忍耐強く戦う創価学会の行動が、間違いなく「自由、正義、平和」の基礎を築いているのです。

## (4) 宗門問題により明確になった成仏の意義

日本では亡くなった人を「仏」と呼び、誰でも亡くなれば仏（ホトケさま）になるという考えや死後に極楽浄土に行くことが「成仏」であるというイメージが定着しています。

宗門の僧俗差別と戦う中で、私たちはあらためて「即身成仏」の意義を確認することができました。今回は大聖人直結の信心こそ、成仏の直道であることを論じます。

### 今回の論点

1. 釈尊を神格化し、成仏は難しいと説いた出家者たち
2. 日蓮大聖人は、成仏の「成」は「開く義なり」と説かれている
3. 葬儀と成仏を結びつけ、大聖人直結の信心に介入しようとする僧侶たち
4. 創価学会により証明された「即身成仏」「一生成仏」の教え

### 1、釈尊を神格化し、成仏は難しいと説いた出家者たち

原始仏教の経典には、釈尊の覚りについて「即時に効果の見られる、時を要しない法」「まのあたり即時に実現され、時を要しない法」と書かれています。このことについて中村元氏は「この文から見ると、ニルヴァーナは即時に体得されると考えていたのである」（『ブッダの言葉』）と述べています。「ニルヴァーナ」は「涅槃」を指し、悟りの智慧（菩提）を完成した境地を言います。すなわち、釈尊は「即身成仏」を説いていたこととなります。

ところが部派仏教の時代になると、釈尊を神格化して、偉大な人格は今生だけの修行で完成されたものではなく、過去の多数の人生での修行に基づくものとされました。そこから、何度も生まれ変わって、極めて長時間に渡る「歴劫修行」が必要になると説かれるようになったのです。そして同時に、その偉大な釈尊に近づけるのは出家者だけであると、出家の優位性・権威が作られたのです。

### 2、日蓮大聖人は、成仏の「成」は「開く義なり」と説かれている

釈尊は誰でも、覚りを得て仏に成れることを示しました。そして大聖人は“覚りを得る”修行として、法華経に説かれた根源の法である「南無妙法蓮華経」を唱え、自行化他の実践をすることを説いたのです。

法華経以外の諸経では「歴劫修行」が説かれていましたが、法華経では、万人にそなわっている仏界を開き現すことで、この身のままで直ちに成仏できる「即身成仏」が説かれました。

成仏の「成」について、「御義口伝」には「成は開く義なり」とあります。唱題によって自らの仏界を開いていくことが成仏なのです。

ところが法主の日頭は「お題目を唱えて、我々の仏界涌現、仏界涌現っていうんだ。こ



れはまさしく大謗法だ」(平成6年8、全国教師講習会)と、大聖人の根本の教えを否定しているのです。

### 3、葬儀と成仏を結びつけ、大聖人直結の信心に介入しようとする僧侶たち

宗門は「僧侶の引導がなければ成仏しない」「戒名がなければ成仏しない」等々、僧侶抜き葬儀では信徒は成仏できないと主張しています。このような考えは江戸時代の「檀家制度」で定着したものです。

檀家制度では、僧侶は檀徒の死後、死相を見届け、檀徒であることを確認して、戒名を授け、引導を渡すことが義務づけられていました。檀徒は、僧侶を呼ばなければ、キリシタンの疑いをかけられ、刑に処されるという恐怖から、必ず葬儀に僧侶を招いたのです。

宗門が死後の儀礼をさかんに成仏と結びつけようとするのは、そこに自分たちが介入できるからです。唱題をして成仏するという修行には、僧侶は必要ありません。彼らが恐れているのは、大聖人直結の信心により、自分たちが必要ないと思われることです。それを防ぐために、宗門は差別を設け、自分たちの必要性を作り出しているのです。

### 4、創価学会により証明された「即身成仏」「一生成仏」の教え

創価学会が誕生した頃、昭和14年の文部省宗教局調査を紹介します。

日蓮正宗の寺院数は75カ寺 住職数は52名 日蓮宗各派の寺院数は4962カ寺、住職は4451名
----------------------------------------------------

宗門がいかにか小さな集団であったか分かります。この頃、宗門の檀家のほとんどは、折伏はおろか勤行・唱題もしていませんでした。

宗門では法主が就任した記念に、御本尊を書写します。そして供養をした檀家に授与していました。ですから、古い檀家の家には多くの法主の御本尊があります。法主が折伏のために御本尊を書写するようになったのは、創価学会が誕生し、折伏を開始してからです。

宗門では唱題行を軽視していました。その証拠に法主の日顛は以下のように述べています。

「三十分ぐらい真剣に行くことはよいと思うのであります。しかし、それ以上は、多すぎることになってもかえって弊害があります」(昭和59年8月 行学講習会)

すなわち、創価学会が誕生する前の宗門では、檀家も僧侶も折伏や唱題をしていなかったのです。その結果、700年経っても小さな集団のままだったのです。

創価学会は大聖人直結の信心で「即身成仏」「一生成仏」の実証を示し、世界に日蓮大聖人の教えを弘めてきました。そこに僧侶の介在は必要ありませんでした。ところが法主・日顛は「ワシが許可した」と言っていたのですから、呆れたものです。

今、宗門が行っている活動は、創価学会のマネでしかありません。しかし学会員の真剣さがないために、折伏の目標はノルマとなり、数をゴマ化して多くの住職が処分されています。

## (5) 宗門問題により浮かびあがった衣の権威の正体

僧侶の着る「袈裟・衣」は「糞掃衣 (ふんぞうえ)」とも言われます。捨てられた衣類や汚れた布で作った衣という意味です。本来、出家者は衣類を含めて財産を持つことを禁じられており、修行僧は執着を離れるために粗末な衣を身に着けていたのです。

その粗末な衣がいつの間にか華美になり、宗教的権威の象徴となってしまいました。その「衣の権威」に惑わされないために、今回はその正体を論じていきます。

### 今回の論点

1. 法主を神格化し、自分たちの権威付けにしている宗門
2. 僧侶の権威を守るため、御本尊にも差別があると説く宗門
3. 本山を聖地化して、世界宗教の道を自ら閉ざした宗門
4. 血脈信仰という信心以外のもので権威を作る宗門

### 1、法主を神格化し、自分たちの権威付けにしている宗門

仏の原語であるブッダは「悟った人、目覚めた人」の意味で一般名詞に近く、釈尊だけのことを指すわけではありません。初期の仏典では、すぐれた修行者たちはみなブッダと呼ばれています。それがやがて釈尊だけをブッダと称するようになります。

そして伝統部派教団は、釈尊の境地は特別なものであるとして、釈尊が「私は人間ではない。仏陀である」と語ったと、神格化された釈尊像が形成されていきました。そして男性出家者のみが釈尊に次ぐ者であると、僧侶の権威が作られたのです。

今の宗門も同じです。彼らは「一切衆生が成仏したとしても、仏界大聖人が上で九界信徒が下であることは、論ずるまでもなかろう。それが、大聖人御入滅後においては、唯授一人血脈付法の御法主上人が上で、一切の大衆は下となるのである」(宗門文書『化儀抄』を拝して)を破すと述べています。九界即仏界である大聖人の教えを捻じ曲げるだけでなく、法主は大聖人と同じであると神格化して、“住職はその法主の名代である”と僧侶の権威付けに利用しています。

### 2、僧侶の権威を守るため、御本尊にも差別があると説く宗門

宗門の僧侶は“信徒の家の御本尊は「仮の本尊」だから、寺院に参詣して寺院の御本尊に唱題しないと功德はない。宿命転換したいのなら、本山(大石寺)の大御本尊にお目通りしなければならない”という言い方をします。大石寺と寺院の権威付けのために、御本尊に差別を設けているのです。

しかし、日蓮大聖人は「此の御本尊全く余所に求ることなかれ只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」(日女御前御返事)と、御本尊は私たちの胸中・生命にあり、余所に求めてはならないと仰せです。

宗門が胸中の御本尊を余所にあるように教えるのは、自分たちが御本尊と衆生の間介在するためです。御本尊直結の信心を認めてしまえば、僧侶の権威が無くなります。彼らはそれを恐れているのです。

### 3、本山を聖地化して、世界宗教の道を自ら閉ざした宗門

古来、大石寺の大御本尊は広宣流布の時まで秘蔵されるものとされてきましたが、特別な縁故の者などに非公式に参拝させる「内拝」という特例がありました。非公式な「内拝」であるにもかかわらず、宗門は“大御本尊にお目通り、登山（大石寺に行くこと）をしないと成仏できない”と御本尊を利用して、大石寺を聖地化しています。

もちろん、大聖人の時代に登山会などはありませんでした。大聖人は佐渡の千日尼へのお手紙に「御面を見てはなにかせん心こそ大切に候へ」と仰せです。大聖人を求める心こそ大切にあり、距離は関係ないので、

オックスフォード大学名誉教授のブライアン・ウィルソン博士は、「特定の“聖地”に行かなければ信仰が全うできないとするのは、世界宗教の要件を欠く」と指摘しています。遠く離れた国の人々に“本山に来ないと成仏できない”と言うのは、その人々の成仏の機会を奪う無慈悲な行為です。

### 4、血脈信仰という信心以外のもので権威を作る宗門

「血脈」とは、法が師から弟子へと受け継がれていくことを意味し、それを血の繋がりにたとえた言葉です。日蓮大聖人は「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに」（生死一大事血脈抄）と、末法の法華経たる御本尊を信受することにより、直接、人々に「仏に成る血脈」を受けさせることが、大聖人の願いであったことが明かされています。

これに対して宗門は『相承』『相伝』を離れた血脈は絶対にありません。学会でいう『大聖人と自分自身の問題である』との考えは、唯授一人の血脈を否定する邪説です」（宗門文書「血脈について」）と主張しています。

この宗門の発想は、やはり、“大聖人と信徒の間に宗門が介在する”という理屈から生じているものです。「相承」「相伝」は法主の継承に関わることであり、直接、信心とは関係ありません。僧侶の権威を守るために、信心以外のものを作り上げ、「大聖人直結」「御本尊直結」「御書直結」を否定するしかないのが今の宗門なのです。

大聖人は「袈裟を著すと雖も猶獵師の細めに視て徐に行くが如く猫の鼠を伺うが如し」（立正安国論）と仰せです。これは、悪僧は獵師が獲物を狙うように、猫がねずみを狙うように人間の心の弱さ、依存心に付け入ろうとするという、大聖人からの警告なのです。

## (6) なぜ、宗門の僧侶は信心を失ったのか？

宗門問題により、宗門の僧侶の無信心な実態があからさまになりました。宗門から離脱した私たちの証言だけではありません。全国の学会の方々からも、信徒を見下して遊興に耽る住職の恥ずべき姿が告発されました。そして同時に「なぜ、僧侶がこのように信心を失ったのか」という疑問を耳にしました。今回は、僧侶が信心を失った原因について論じます。

### 今回の論点

1. 檀家制度により、生きている人を救うことを忘れた僧侶たち
2. 僧俗差別により信心がなくとも敬われる僧侶たち
3. 法を守ることが僧侶の役目と言い、折伏を軽んじる僧侶たち
4. 感謝を忘れ贅沢や遊興にふけり、人間としての成長を失った僧侶たち

### 1、檀家制度により、生きている人を救うことを忘れた僧侶たち

江戸時代の檀家制度の元で、幕府は積極的に寺院を優遇し、檀家の責務として、菩提寺への参拝、年忌・命日法要の施行、寺院への付け届けまでも義務と決めました。この他に寺院の改築費用や本山への上納金などの名目で、檀家は経済的負担を強いられました。中には、身分を証明する「寺請証文」の発行の権利を悪用し、檀家に必要以上の金銭を要求する僧侶もいました。

この制度によって、寺院は布教をしなくとも、一定数の檀家を得ることができ、僧侶の生活は保障されることになりました。その結果、僧侶は生きている人を救うことを忘れ、葬儀や法事に専念するようになったのです。これが日本の仏教が「葬式仏教」と揶揄されることになった由縁です。

### 2、僧俗差別により信心がなくとも敬われる僧侶たち

以前にも指摘しましたが、宗門は「僧侶は、総本山において修行し、血脈付法の御法主上人より免許を蒙った法衣を着ているのでありますから、大聖人の仏法の法位において、当然信徒より上席であります」（宗門文書「宗務院よりの指摘」）と主張しています。しかし、私たちの知る限り、本山で特別な修行などありません。信心の修行で比べるならば、僧侶の信心など、社会の中で働きながら、唱題・折伏をされている学会の方々の足元にも及びません。

末寺の住職を見ても、日ごろから唱題もせずにゴルフやカラオケと遊興に励み、折伏もせず、その理由を「折伏は学会のやることだ」と言うのでした。それにもかかわらず、法衣を着ているだけで、信徒から「先生」と呼ばれて敬われることを当然のことと思っている住職がほとんどでした。“法衣を着ているから、信徒よりも上である”という差別意識

が信心を失わせる原因の一つであったことは確かです。

### 3、法を守ることが僧侶の役目と言い、折伏を軽んじる僧侶たち

法主であった日頭は「僧と俗は令法久住と広宣流布について一体の使命をもつものであります。ただし、一体といっても、その中に自ずから区別があります。すなわち僧侶はとくに令法久住という意義において、在家は折伏、広宣流布という面において、それぞれ重大な使命を担っているのです」（宗門文書「お尋ね」）と述べていました。

これは一見、役割分担のように見えますが、決して日蓮大聖人の教えではありません。何よりも、大聖人御自身が不惜身命の折伏行を実践されています。その弟子として血脈を受けていると言うのなら、難を受けても折伏をすることが弟子の証明です。そもそも折伏なき令法久住など、大聖人の仏法には考えられません。もし、役割分担を理由に折伏をしないのなら、宗門には大聖人の信心の血脈はないということになるでしょう。折伏を軽んじる理由を作ることによって、僧侶は信心を失ってしまったのです。

それでも宗門は創価学会の皆様の信心、懸命なる折伏と外護の精神によって守られてきました。創価学会と和合していたからこそ辛うじて信心の血脈につながっていたと言えるでしょう。その創価学会を破門し、宗門は自ら信心の血脈を断ち切ってしまったのです。

### 4、感謝を忘れ贅沢や遊興にふけり、人間としての成長を失った僧侶たち

法主であった日頭は平成6年5月に「彼らは、ジーンと御供養して信仰やって、坊さんが墮落するのを待ってたんです」（全国教師寺族指導会）と述べていました。この発言は彼らが誘惑・煩惱に負けて墮落してしまったことを認めているものです。そして、その責任を自分たちではなく、供養した人々に転嫁しているのです。これは盗人が、「盗みを働いたのは、被害者がお金をたくさん持っていたからだ」と言うのと同じ理屈です。

日蓮大聖人は「但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ」（曾谷殿御返事）と仰せです。自分が罪を犯したのだから、正直にその罪を懺悔しなければなりません。

また、宗門の僧侶には供養に対しての感謝がありません。住職の中には、「供養させてやっているんだ。信徒は供養することによって功德をもらうのだから、僧侶に感謝すべき」と言う者もいます。このような考えは僧侶というより、最早、人として恥ずべきことです。大聖人が「法師の皮を著たる畜生なり」（松野殿御返事）と言われている通りです。

大聖人は信徒からの供養に対して「民のほね（骨）をくだけの白米・人の血をしぼれるが如くなる・ふるさけ（古酒）」（松野殿御返事）、「白米は白米にはあらず・すなはち命なり」（白米一俵御書）と仰せです。大聖人は、供養の背後にある過酷な苦勞を思いやられ、最大の賛辞の言葉を捧げられています。これが人としてあるべき姿、「振る舞い」なのです。宗門の僧侶は「贅沢」という魔に魅入られ、人間としての成長を失ってしまったのです。

（以上）